

上野殿御返事

建治元年五月三日 五四歳

五月の二日にいものかしらいしのやうにほされて候を一駄、富士の上野身
 のぶの山へをくり給びて候。仏の御弟子にあなりちと申せし人は、天眼第一のあなりち
 とて、十人の御弟子のその一。迦葉・舍利弗・目連・阿難にかたをならべし人なり。
 この人のゆらひをたづねみれば、師子頰王と申せし国王の第二の王子に、こくぼん王
 と申せし人の御子、釈迦如来のいとこにておはしましき。この人の御名三つ候。一には
 無貧、二には如意、三にはむれうと申す。一々にふしぎの事候。昔うえたるよに、りだ
 そんじゃと申せしたうとき辟支仏ありき。うえたるよに七日ときもならざりけるが、
 山里にれうしの御器に入れて候ひけるひえのはんをこひてならせ給ふ。このゆへにこの
 れうし現在には長者となり、のち九十一劫が間、人中天上にたのしみをうけて、今最後
 にこくぼん王の太子とむまれさせ給ふ。金のごきにはんとこしなへにたえせず、あら
 かんとならせ給ふ。御眼に三千大千世界を一時に御らんありていみじくをはせしが、法
 華経第四の巻にして普明如来と成るべきよし仏に仰せをかほらせ給ひき。妙楽大師此
 の事を釈して云はく「稗飯輕しと雖も所有を尽くし及び田勝るゝを以ての故に故に勝
 報を得る」と云云。釈の心、かるきひえのはんなれども、此よりほかにはもたざりしを、
 たうとき人のうえておはせしにまいらせてありしゆへに、かゝるめでたき人となれりと
 云云。此の身のぶのさわは石などはおほく候。されどもかゝるものなし。その上夏の
 ころなれば民のいとまも候はじ。又御造営と申し、さこそ候らんに、山里の事ををもひ
 やらせ給ひてをくりたびて候。所詮はわがをやのわかれのをしさに、父の御ために釈迦
 仏・法華経へまいらせ給ふにや、孝養の御心か。さる事なくば、梵王・帝釈・日月・四
 天その人の家をすみかんとせんとかかはせ給ひて候。いふにかひなきものなれども、約束
 と申す事はたがへぬ事にて候に、さりともこの人々はいかでか仏前の御約束をばたがへ
 させ給ふべき。もし此の事まことになり候はゞ、わが大事とおもはん人々のせいし候。
 又おほきなる難来たるべし。その時すでに此の事かなうべきにやとおぼしめして、いよ
 いよ強盛なるべし。さるほどならば聖靈仏になり給ふべし。成り給ふならば来たりてまぼ
 り給ふべし。其の時一切は心にまかせんずるなり。かへすがへす人のせいしあらば心に
 うれしくおぼすべし。恐々謹言。

五月三日

日蓮花押

上野殿御返事